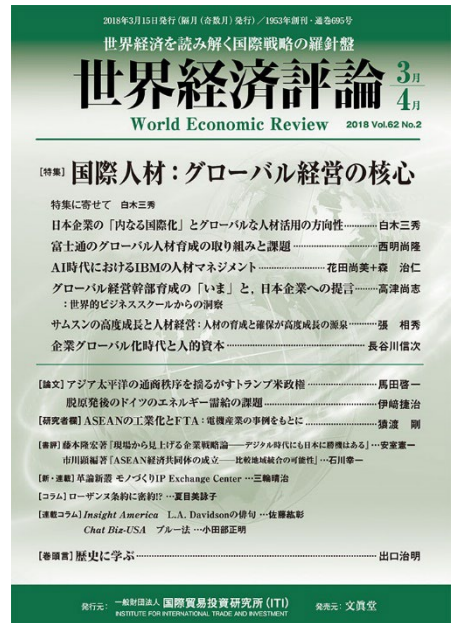


本論文は

世界経済評論 2018年3/4月号

(2018年3月発行)

掲載の記事です



世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料
OFF



富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



☎0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

現場から見上げる 企業戦略論

——デジタル時代にも日本に勝機はある

兵庫県立大学・大阪商業大学名誉教授 **安室 憲一**



[著者]

藤本隆宏（ふじもと・たかひろ）

東京大学大学院経済学研究科教授

[発行] 角川新書，2017年7月刊

[判型] 新書版，320ページ

[定価] 本体920円＋税

本書は、藤本隆宏教授の現場観察による知の集積に基づき、日本企業および日本経済の再構築を考察した書物である。著者は、以前から日本企業の「現場」は強い能力構築力を持つが、それに比して「本社」の戦略構築力が弱いことを指摘してきた。今日では、アップルやインテルに代表される「プラットフォーム盟主企業」が業界標準インターフェイスを構築し、他社の製品（補完財）を仲間に引き込み、そのエコシステムの盟主となって巨大化している。競争優位は「製造現場」から「本社」の戦略ないしビジネスモデルに移行したように見える。残念ながら日本企業にプラットフォーム企業はまだない。AI・ビッグデータ時代には、日本の製造企業は「プラットフォーム盟主企業」の下請け

になるかもしれない。そうならないためにはどうすべきか。本書はこの課題に答えようとする。

序章では本書を貫く問題意識が示される。従来の「質量」をもった製造物の世界に対し、ICTの進展によって「質量を持たない」デジタル世界が出現した。両者をどのようなコンセプトで結合するかが未来の競争戦略の要になる。著者は、現実の製造現場を「地上」と表現し、デジタル世界を「上空」と表現する。「地上」の製造現場の課題はFA（ファクトリー・オートメーション）などのものづくり能力の構築であるが、「上空」のデジタル世界では「質量のない」AIやビッグデータが主流になる。そこで問題となるのが中間層、著者の言う「低空」での争奪戦である。つまり、第4次産業革命やIoTの要になる「現場のFA情報」をCPS（サイバー・フィジカルシステム）に吸収・支配されることなく、現場により近い「低空」に繋ぎ止め、「能力構築力」の範囲に包摂することである。「地上」の情報と「上空」のサイバー層を繋ぐ中間層、つまり「低空」のICT-FAインターフェイスを支配する者が次の覇者となるだろう。これが第4次産業革命の基本コンセプトである。

第1章は、現場の能力構築力についての分析。第2章は戦後の日本企業の競争力構築の歴史。第3章は、グローバルな能力構築競争での勝ち方のパターンについて論じている。1章から3章は、これまでの著書でも繰り返し論ぜられているので詳細は割愛しよう。重要なのは第4章である。著者は、世界のトレンドとして製品に対する要求がますます厳しくなることは、インテグラル（すり合わせ型）を得意とする日本企業にとって有利になること。電子機器などモジュラー型製品が普及しても、日本企業は部品やモジュールの作り方をよりインテグラル（外モジュラー中インテグラル）にすることで、「強い補完財戦略」が取れること。日本及び東南アジアを中心とした「ICT-FAインターフェイス」（「低空」）の標準化を推進し、ドイツ勢やアメリカ勢と棲み分ける「天下三分の計」を提案している。

本書はどの章を読んでも示唆に富み、深く考えさせられる。産金官学のリーダーだけでなく学生諸君にも薦めたい。日本企業の将来について深く考える教材にしてほしい。

（やすむろ けんいち）